

平成24年度 仙台市小学校長会生徒指導研修会

文教大学教授 柳生和男 氏を講師にお迎えし、平成24年度の仙台市小学校長会生徒指導研修会が11月22日仙台市教育センター 大研修室にて開催されました。

平成24年度 仙台市小学校長会生徒指導研修会

平成24年11月22日(木)

10:00~11:45

仙台市教育センター 大研修室

- | | | |
|-----------|-------------|-------|
| 1 開会のあいさつ | 仙台市小学校長会会長 | 野澤 令照 |
| 2 講師紹介 | 仙台市小学校長会副会長 | 中館 富也 |
| 3 講演 | | |

テーマ

「生徒指導における教育相談の役割」

講師

文教大学情報学部

教授 柳生 和男 氏



- | | | |
|-----------|----------------|-------|
| 4 閉会のあいさつ | 仙台市小学校長会生徒指導部長 | 菅野 正彦 |
|-----------|----------------|-------|

< 講演の概要 >

【テーマについて】

- ・主体的でない，という現状があるから『主体性』と言っている。教師たちは専門家に任せておけばよいと思っている（丸投げ意識をもっている）。
- ・不登校児童生徒は16万～17万人（グレーゾーン含めると20万人）いる。教育の行き届いている先進国では信じられない数字。1980年代以来の不登校対応の結果と思われる。ロジャース理論の、『話を聞けばよい』という態度。
- ・ロジャース理論（児童中心主義）—「共感」「受容」「ありのまま」「登校刺激を与えない」。しかし，聞いているだけ，うなずいているだけではだめ。これだけが残ってしまったことが問題。後にロジャース自身も反省している。
- ・登校刺激を与えてはいけない子どもは脳疾患のある0.5%ほど。99.5%は登校刺激を与えた方がよいケース。

【心とは】

- ・脳の疾患による問題は0.5%ほど。小学生ではほとんどなし。
- ・不登校は状態を学習して定着してしまう。3日目で迎えに行けば4～5割は復帰できると思われる。

【事例に学ぶ】

- ・不登校，いじめは『早期発見即対応』が必須。気づいたら，人に相談する前に自分で動け。相談にかかる時間で時期遅れになってしまう。教師が関わることが大事。
- ・家庭訪問の重要性。問題はどこにでも起こるのではない。条件がそろって起こる。起こりうる理由が家庭内にある。

【いつでもどこでもだれでも行うということ】

- ・非指示的なことがカウンセリングと考えていることが問題。ここから脱却すること。
- ・正しいアセスメント。心のどこに問題があるのかを，教師が判断。あらゆる方法で，あらゆる場所で，時に集団を，時に個人を対象に，時にチームで時に教師単独で。

【教師の作用と位置】

- ・「頑張れ」と言うのが教師の仕事（言っではいけない子は0.5%）。系統的ストレスを与えてたくましく育てるのが学校の仕事。
- ・学級経営がしっかりできる（学級をいじれる）担任でなければだめ。

【生徒指導に教育相談を生かす】

- ・担任は1日5回は全部の子と目を合わせましょう。話をしましょう。
- ・子どもに付く。子どもに関わる。問題は教師のいないところで起こる。休憩時，掃除，部活等。研究授業，職員会議より優先順位は上。
- ・規則があるのに守られない規則がある学校は荒れる。
- ・校長と教員のコミュニケーションが重要。

【発達課題への対応】

- ・小学校低学年時期は，形・体で覚えさせる。言語的カウンセリングが可能なのは高学年頃から。

【関係機関・専門家との連携】

- ・組織化されると動きが遅くなる。手遅れになってしまう。まず，教師が主体的に動くこと。専門家に任せるのではなく，『利用』すること。